泌尿器科

泌尿器科　部長
奈須　伸吉

－国立大分病院・大分医療センターでの 10 年間の歩み－

初代の植田覺泌尿器科部長から、河野信一部長、溝口裕昭部長の後を引き継ぎ、2000 年 6 月に国立大分病院泌尿器科部長として赴任してから、ちょうど 10 年経ちました。かつて、河野部長の下で 2 年間勤務したことはありましたが、科の責任者としての大在の地は初めてでしたので、縁故がほとんど無く、当初は他院からの紹介も少なくて、外来や病棟では閑古鳥が鳴いていました。赴任初月の平均入院患者数は 8 名で、初年度の手術件数は 100 例台と、今よりはるかに少なかったです。初心を忘れないように、その時の患者数の院内資料を今でも机のそばに貼っています。また、病理解剖医の資格を持っていたため、勤務時間外の病理解剖当番を、数年間兼任していました。

1 年目にはまず、前勤務地である大分大学泌尿器科での臨床経験を生かして、自ら専門として取り組む分野を腹腔鏡手術と腹膜透析（CAPD）と決めました。なお、大分大学泌尿器科に在籍した 8 年間には、緒方二郎初代教授、野村芳雄前教授、三股浩光現教授や今川全晴先生（現大分赤十字病院泌尿器科部長）の他、多数の先輩に臨床指導を受けています。

その後、部長職に慣れてきた 3 年目には、腎臓内科の撤退に伴って血液透析部門を引継ぐとともに、病棟を移動（6 階から 5 階へ）し苦労しましたが、今ではいい思い出となっています。その後は、主に県中東部から徐々に患者が集まるようになり、患者数は順調に増えてゆきました。ここ数年は、年間手術・生検件数 500 例近くが、続いています。大分東医師会の先生方をはじめ、泌尿器科開業医の先生方、連携病院の先生方には、いつも多数のご紹介をいただき、大変ありがたく思っています。

当院に来てからの、私にとって最も大きな転機は、腹腔鏡下前立腺全摘除術を開始したことと、泌尿器腹腔鏡技術認定医の資格を取得できたことです。まず 2003 年より、他院ですでにこの手術に取り組んでいた溝口裕昭先生を目標にして、腹腔鏡下前立腺全摘除術を始めました。腹腔鏡下前立腺全摘除術の件数は現在までに 140 例を超え、西日本（岡山～沖縄県）では最多となりました。大分県内で、現在も継続してこの手術を行っている医師は私だけです。そして、2004 年には日本泌尿器科学会による泌尿器腹腔鏡手術技術認定医制度ができましたが、これは、真に腹腔鏡手術を安全にできる技術を持った泌尿器科医を認定する制度（手術録画ビデオの審査などから成っています）で、初年度には全国で 90 数名が合格しましたが、このうち大分県では、私を含めて 4 名が認定医になりました。

この様なこともあり、ますます腹腔鏡手術にのめり込んでゆき、気がつくと 10 年も経っていました。現在は、腹腔鏡手術を執刀するとともに、泌

尿器腹腔鏡手術の指導者として後進を育成し、専門医の選定にも関与しています。このように当科は、先進的な医療を行っていますが、それだけではなく、多くのポピュラーな疾患の治療や癌などの終末期医療まで、あらゆることをしています。実は、大分市市内から大分川に掛かる橋（弁天橋、舞鶴橋、広瀬橋など）を渡って東側に行くと、佐伯市に至るまでは、泌尿器科常勤医が 3 名体制の総合病院は当院のみ、なのです。

50 歳をすでに過ぎ、自信のあった体力にも多少翳りが見えるものの、気力はますます充実しています。20 数年培った臨床経験を基に、これから先の 10 年は、病める人が少しでも安心して過ごせるように配慮し、より安定した医療を目指そうと思っています。

また、最近では、内分泌療法抵抗性再燃前立腺癌、慢性腎臓病の進行防止、慢性腎臓病に伴う高 P 血症などの臨床治験なども行っています。

ここまで曲がりなりにもやれてきたのは、関連医療機関の先生方や、当院の職員の皆さん、当院で共に働いた泌尿器科の先生方の御協力のおかげであると大変感謝しています。まもなく、待望の新・大分医療センター病棟ができます。泌尿器科病棟は 1 階になり、透析室と ESWL 室もあります。心機一転、安全な医療を求めて努力してゆきますので、何卒よろしくお願いいたします。

泌尿器科の腹腔鏡手術

腹腔鏡手術とは、腹部の内臓にできた疾患（癌など）の手術法で、腹部に 3−5 箇所の小さな穴を開けて、そこから内視鏡（内臓を観察するカメラ）や手術の道具を体内に差しこんで、肉眼よりはるかに良好な視野のもとで、臓器の摘出などの操作を行い、小さな創から体外に取り出す手術です。解剖（血管の構造、臓器どうしの境界）が正確にわかり、安全で根治性の高い手術ができます。また、手術創が小さい為手術後の疼痛が軽く、早期の離床と回復に有利な手術です。なお当科では、患者さんとそのご家族には、術前に 1−2 時間かけて丁寧な治療説明を行い、十分納得していただいて手術をするようにしています。

大分医療センター泌尿器科では、10 年間（2000 年 6 月～ 2010 年 5 月）に、手術（前立腺・腎の生検を含む）を 4213 例行いました。このうち、腹腔鏡手術の件数は 368 例（9%）で県内ベスト 3 に入りますし、その前の 4 年間（溝口裕昭前泌尿器科部長）（1996 年 6 月～ 2000 年 5 月）の件数を合わせると、当科での腹腔鏡手術の総件数は 500 例を越えます。現在も、前立腺癌に対する腹腔鏡下前立腺全摘除術をはじめ、腎腫瘍・副腎腫瘍など多数の腹腔鏡手術を、全国的に通用するレベルで安全かつ正確に行っています。

① 腹腔鏡下前立腺全摘除術

前立腺癌の根治術です。体内より前立腺を摘出し、残った膀胱と尿道を吻合し尿路を再建するという、泌尿器科領域では最高難易度の腹腔鏡手術です。当科の腹腔鏡手術の中では再多数を占め、安定した成績を得ており、県外からの紹介もあります。もともと拡大視野で手術ができるため、癌の根治性が高く早期回復ができる方法ですが、手術方法を改良することにより、術後についても尿失禁は軽減し、鼠径ヘルニアの発生も無くなってQOL が改善されました。

健康診断の結果などで、PSA が高い方が受診された場合は、当科で精密検査（MRI、前立腺生検）をどんどんしていますので、お気軽にご紹介あるいは受診してください。

② 腹腔鏡下腎（尿管）摘除術

腎癌または腎盂尿管癌の根治術です。当科ではこれまでに 131 例行っています。腹腔鏡下前立腺全摘除術より容易にでき、すでに安全に根治性の高い方法で行える手技を確立しており、技術的には県内でトップクラスであると自負しています。ところが、腎癌などは健診などで見つかるケースが多く、近隣に健診センターが少ない当院には、紹介される機会がどうしても少なく、残念なことに、同規模の泌尿器科に比べると手術件数がやや少ないようです。

大在には、大分県東部の要、大分医療センターがありますので、ぜひ当院での治療をご検討ください。

③ 腹腔鏡下副腎摘除術

副腎皮質あるいは髄質腫瘍の根治術です。当科ではこれまでに 21 例を行っています。 前記の前立腺、腎腫瘍の腹腔鏡手術に比べると、はるかに容易な手術で、これもすでに手技を確立しています。

大分大学在籍中には多数の副腎腫瘍の手術に関与しましたが、当院に来て見ると、とても少ないので残念に思っています。その理由は 2 つ考えられますが、まず、副腎腫瘍自体が泌尿器科で手術できることがいまだに認知されていないことと、大学病院の時には内分泌科などを通じて多数の紹介が有りましたが、当院には副腎腫瘍の紹介の流れが無く、このため非常に少ないのが現状となっています。

最近では、高血圧患者の 5－20％は原発性アルドステロン症であると言われています。高血圧症のある患者に、一度は副腎ホルモンの検査や CT をしてみると、副腎腫瘍が見つかる例が増加すると思います。

当院には、代謝・内分泌内科と泌尿器科が揃っており、副腎疾患を診断・治療できる体制が整っています。どうぞよろしくお願いいたします。

腹腔鏡手術の様子 ①